

土佐のわらべ

第372号 《第394回（2012. 5. 10）子どもの本の読書会記録》参加者6名・文書参加4名

『クワガタクワジ物語』

中島 みち／著 偕成社

太郎君は、小学二年生。夏至の日に三匹のコクワガタを捕まえます。毎日、八幡様の森でくぬぎの木のパトロールを続けていたので嬉しくて仕方ありません。クワイチ・クワジ・クワゾウと名付けて飼うことにしました。それから、太郎君は四年生の夏迄の間、クワジ達と過ごすことになります。

このお話は、クワガタを通じて命の大切さを学んだ太郎君の成長物語です。

最初は捕まえることに喜びを感じていた太郎君ですが、真夜中の森での虫捕りで『捕まった虫たちは運が悪い』と呟きます。十和田湖の原生林から連れて来たミヤマクワガタがバラバラになって死んだ時には『遠い所から連れて来て、殺したのは自分。可哀想なことをした』と思います。死んだ虫を原っぱに戻してやり、魂に『元気でね』と祈ったり、自分以外に助けるものがない虫たちを死なせてしまった時は、辛さに涙を流したり。太郎君は、たった2cmの虫の死に『生まれたものは、みんな一度は死ぬ』と気付かされます。

また、原生林で成虫になって10日程で死んでいくミクラミヤマクワガタを見て、本当なら半年程で死ぬクワジ達が人に砂糖水を貰い、冬越えをして長生きすることが幸せなのか？とい

う思いが湧いてきます。クワジ達がクワガタとして幸せかどうか分からないけれど、飼い始めてしまったのだから出来るだけのことをして長生きさせねばと考えますが…。四年生の夏、最後に残っていたクワジを不注意で死なせてしまいます。一番元気で人懐こくて、可愛いチビ、クワジ。生まれたくぬぎの木の下に埋めてあげながら長生きできなくても人間なんかには捕まらないで、この森で死んだ虫の方が幸せだったのではないかと考えます。

クワガタから命の大切さを学んだ太郎君ですが、太郎君を見守る両親がいたからこそ。子どもの心を育て興味あることを伸ばすには、親のサポートが必要です。そして、それを一歩進める時、周りの環境も必要です。

この本の中で、博物館の研究室で話を聞く場面がありますが、どこでも環境が整えられているわけではありません。これからの課題だと思います。

クワガタの飼育を通じて太郎君の世界は広がりました。子どもの成長は凄い。それが追えて良かったです。冬を越えたコクワガタのクワミちゃんの特別参加もあり、楽しい読書会でした。

(R. S)